福岡県立大学心理臨床研究，11巻，2019，33-41　［研究論文］

親との心理的距離及び子どもの夫婦関係の認知と「頼れる感」の関連

吉岡　和子*・野口　彩夏**

要旨

本研究では、親との心理的距離及び子どもの夫婦関係の認知と「頼れる感」の関連について検討した。青年期は親との関係にアンビバレントになる時期であることから、意識的、自覚的に認知している心理的距離（尺度）と前意識的、無意識的に感じている心理的距離（投映法）、子がそれらの心理的距離をどう評価するかを尋ねることで、心理的距離をより多角的に捉えた。さらに、夫婦関係をどのように認知しているかと各心理的距離との関連からも検討した。

父親と母親との心理的距離については、測定の仕方で結果が異なること、投映法での心理的距離よりも、質問紙及び心理的距離の評価などの意識的な水準での心理的距離の方が子どもの「頼れる感」との関連が強い可能性が示された。また、夫婦間の距離よりも、自分と両親の心理的距離の方が「頼れる感」に影響していること、父よりも母との心理的距離の方が「頼れる感」に影響している可能性が考えられた。

キーワード：心理的距離、夫婦関係認知、「頼れる感」

【問題と目的】

1．親との心理的距離

親との関係が大きく変化する青年期は依存と自立の間で揺れる時期であり、その時期での親との心理的距離は子どもにとって重要であると考えられる。青年期には、それまでの親に依存した時期を脱し、自分でできることが増え、主な対人関係が親子関係から友人関係に移行する。しかし、まだ完全に親から自立できるわけではなく、親との関わりや助けを必要とする場面もあるため、親との心理的距離はアンビバレントなものになりやすい。

土田・田中・鈴木（2009）によると、親との心理的距離が近いと、親から見られている自分のイメージをポジティブに認知することが示されており、親との心理的距離が近いことは、子にとって自身に対するポジティブな認知と関連しているといえる。一方、高橋・生島（2017）は，母娘間距離が自立を迎えようとしている青年期女性の自立や健康とどのように関わっているのかを検討している。その結果、母親との信頼関係を基盤として心理的に分離しているとされる「自立型」は母親との距離の近さが，娘の精神的自立や精神的健康に促進的に働き，母子密着の程度が高く心理的分離の程度が低い「密着型」は母親との距離の近さが，娘の精神的自立や精神的健康を阻害していることが示されている。このように、親と子の心理的距離が近いことにはポジティブな側面とネガティブな側面があることが考えられ、心理的距離を理解する上では、複数の視点から捉えることが必要になると思われる。そこで、本研究では、青年期が親との関係にアンビバレントになる時期であることから、意識的、自覚的に認知している心理的距離（尺度）と前意識的、無意識的に感じている心理的距離（投映法）の差に注目して検討する。また、それらの心理的距離を主観的にどう評価するかも、心理的距離の影響を検討する上では重要であると考えられる。そこで、子自身の距離への評価を尋ね、より心理的距離を多角的に捉えることとする。

* 福岡県立大学大学院人間社会学研究科心理臨床専攻　教授
** 福岡県立大学大学院心理教育相談室　非常勤相談員

２．子どもの夫婦関係の認知と親との心理的距離

子どもにとって夫婦関係はもっとも身近で、常に目にする対人関係のやり取りであり、子どもに大きな影響を与える。夫婦関係と親子関係、子の心理的健康の関連を示唆した研究は多く、伊藤（2001）では夫婦関係を良好だと感じていると子の自尊感情が高まることが示唆されていることから、夫婦関係の認知は、直接子どもの自尊感情に影響を与えるといえる。また、内田・石田（2014）は、両親の夫婦関係の認知の良好さが子どもの自尊感情を高め、それを介して子どものレジリエンスを高めることを示唆している。これらの研究から、子の夫婦関係の認知が子どもの心理的側面に直接影響を及ぼすだけでなく、何らかの媒介を経て影響を与える道筋も考えられる。大島（2013）では、両親の夫婦間の信頼感が、母親、父親それぞれの子への関わりに影響を与え、その関わり方が子の抑うつの低さ、幸福感の高さと関連していることが示されている。このことから、子の夫婦関係の認知は、現実に親子の関わり方に影響を及ぼすことが推測される。子が両親の夫婦関係が良好であると認知しているほど、家庭内に居場所を作ることができ、親と過ごす時間が長くなったり話したりすることが多くなるだろう。親との心理的な結びつきを感じたり、親と理解し合えたりという感覚が高まり、心理的距離が近くなることが予想される。逆に、夫婦関係が良好でないと認知している子は、親に自分を理解してほしいとも、自分が親を理解したいとも思えず、理解し合えている感じを持てない、つまり親との心理的距離が遠くなると考えることができる。

しかし、夫婦関係の認知の良好さは、そのまま親子の心理的距離の近さにつながり、子の心理的側面にポジティブな影響を及ぼすといえるだろうか。例えば、家族療法の視点からは「母と近く、夫婦は遠く、父と遠い」というのは、母親に巻き込まれている関係性、「母と近く、夫婦は遠く、父とも近い」は間を取り持つような関係性、「母と遠く、夫婦は遠く、父と近い」は三角関係の中で母と対抗している関係性などとされる。そのため、夫婦間の距離（子の夫婦関係の認知）と親子の心理的距離を併せて、子の心理的側面に及ぼす影響を検討することが重要であると考える。そこで本研究では、夫婦関係の認知自体と親との心理的距離の組合せにも注目する。

３．「頼れる感」

先述したように、青年期ではまだ完全に親から自立できるわけではなく、親との関わりや助けを必要とする場面もあるため、自立の準備をしながらも親の援助が必要な場合は自分で親に働きかけなければならない。そのため親との関係は常に依存してよいものではなくなるが、必要な時に必要な手助けを求めなければならないという難しいものになる。この時期に親との間で自立しつつうまく頼るという経験を積むことができないでいると、他者との関係においてもどの程度人に頼っていいか分からなかったり、頼ることで相手に迷惑をかけてしまう不安が強くなってしまったりして、ほどよく頼ることができなくなってしまうのではないだろうか。頼ることを巡って従来用いられてきた「甘え」、「依存」という言葉は、人に頼ることについてネガティブなイメージを与える（土居、1971）。しかし、人にほどよく頼れることは、相手と協力することで良好な対人関係を築くことを可能にしたり、自分の負担を減らして作業をスムーズに進めたりすることを可能にするなどの利点もある。よって本研究では、人に頼ることに対してネガティブな印象を与える「甘え」や「依存」という言葉ではなく、ポジティブな側面を強調する「頼れる感」という言葉を用いる。ほどよく頼るためには、ある程度の心理的な成熟が必要となる。自分と他者を別の存在と認識し、他者の気持ちを考える必要があると考える。自分と他者を別の存在と認識することは、自分にできることと他者にやってほしいことを仕分ける際に必要である。また、自分と他者を同一化していると起こると思われる過剰な要求を防ぐことにも繋がる。そして他者の気持ちを考えることは、頼る相手の気持ちを考えて、一方的に自分の要求をぶつけず、感謝の気持ちを持つことであり、それが対人関係を壊さないことになり、頼ることへの抵抗感が生まれないことに繋がると考えられる。そこで、本研究では「自分にできることは自分でやり、自分が苦手なところを相手に補ってもらい、相手に感謝する」ことを「頼れる感」と定義し、この定義をもとに尺度を作成する。

４．本研究の目的

本研究では、親との心理的距離と子どもの夫婦関係の認知及び「頼れる感」の関連について検討することを目的とする。

【方法】

１．調査時期および調査対象

2015年11月～ 12月に、福岡県立大学の学生（1 ～

3年生）271名（男性45名：平均年齢19.24歳（1.18）、女性226名：平均年齢19.10歳（0.86））に質問紙調査を実施した。

2．調査内容

1）親との心理的距離について

（1）尺度を用いた測定

金子（1989）の心理的距離尺度10項目を用いた。この尺度は例えば「私は□のことを非常に信頼している」といった項目の□部分に父親、母親などをあてはめることで、さまざまな対象に感じている心理的距離を測定することができる。また、心理的距離を，「自己が，ある他者との間で，どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ，どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合」と定義し作成されている。

本研究では、「①父、母両方を書いた人」には、父親、母親の２人をあてはめ、「②父、母のどちらか１人を書いた人」には、親、友人の２人をあてはめ、「③父、母のどちらも含まない人」には、家族構成に書いた中で一番親しい人、友人の２人をあてはめ、回答を求めた。父親、母親、親、友人、□のそれぞれについて、「あなたとの関係について、当てはまる数字に○をつけてください。」と教示し、「ほとんどあてはまらない（0点）」から「かなりあてはまる（4点）」の５件法で回答してもらった。心理的距離が遠いほど高得点になるようにした。

（2）投映法を用いた測定

美山（2003）を参考に作成し（Figure1）、父親と母親について尋ねた。

相手との関係の深さ、関係親密度、親密性との関連が示され、投映的測定方法の妥当性が検証されている（美山、2003）。

円の中心から円の中心までの距離を測定し、0.5㎝ごとに１点として9.5㎝まで19段階で得点化した。

教示例「下の○があなただとします。あなたが感じる父親との心理的距離（あなたが感じる父親との気持ちの距離）を考えて、父親の○を線の上に描いてください。あなたの○と父親の○が近い程、あなたが感じる父親との心理的な距離が近いということになります。」

また、線分の上には例を図示した。

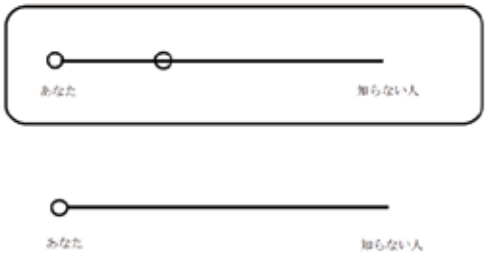

Figure1：投影法を用いた心理的距離

（3）心理的距離の評価

質問紙、投映法での心理的距離に答えてもらった後、その心理的距離をどのように捉えているかを尋ねた（Figure2）。「あなたは父親との心理的距離について、どのように思いますか。あてはまるところに○をつけてください。」と教示し、「かなり近い」から「かなり遠い」の７件法で回答してもらった。以下、距離の評価とする。

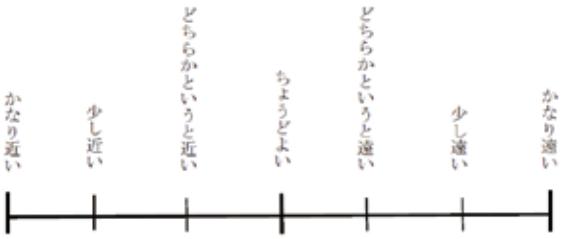

Figure2：心理的距離の評価

2）子どもの夫婦関係の認知

諸井（1998）の夫婦関係満足尺度６項目を用いた。「以下の質問について、日頃のあなたの気持ちにどれくらい当てはまるかを答えてください。」と教示し、「ほとんどあてはまらない（1点）」から「かなりあてはまる（4点）」の４件法で回答してもらった。本研究では、得点が高いほど夫婦の関係性は近いとする。

3）「頼れる感」

「自分にできることは自分でやり、自分が苦手なところを相手に補ってもらい、相手に感謝する」という定義を用い、多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原、2004）、信頼感尺度（天貝、1995；1997）、対人依存欲求尺度（竹澤、小玉、2004）を参考にして独自に作成した。そして、心理学を専門とする教員２名に項目の妥当性の確認を依頼し、修正した19項目を「頼れる感」尺度とした（Table1）。

「以下の項目について、自分にあてはまると思う数字に○をつけてください。」

【結果】

1．「頼れる感」尺度の尺度構成

Cronbachのα係数の算出を行い、「頼れる感」尺度

Table1　頼れる感尺度

1.	人に頼るときは、自分が苦手なところだけでなく、すべて任せる。
2.	人に頼るときに、自分にできることは自分でやる。
3.	人を頼っても相手は嫌な気持ちにならないと思うので、人を頼ることができる。
4.	自分ができないことを人に頼むのは恥ずかしい。
5.	勉強がうまくいかないときは、人を頼ることができる。
6.	授業についていけないときは、人を頼ることができる。
7.	学校で具合が悪くなった時、人を頼ることができる。
8.	自分１人でできない課題があったときは、人を頼ることができる。
9.	自分で調べても分からないことがあったら、人を頼ることができる。
10.	人を頼ったとき、相手に感謝する。
11.	人に頼るとき、自分でできることを常に探す。
12.	人に頼るのは、相手が自分よりうまくできると思ったときだ。
13.	人に頼ることで、その人との関係が深まると思うので、人に頼ることができる。
14.	自分１人ではできそうになくても、人に頼らず自分でやらないといけない。
15.	人に頼るのは、自分が何もできないときだ。
16.	私は現実に信頼できる特定の他人がいる。
17.	人に頼るとき、自分が苦手なところができそうな人に頼む。
18.	頼るからには、自分だけでやるより良い結果を出してほしい。
19.	私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていける。

の内的整合性の検討を行った結果、19項目でのα=.740であった。より高い内的整合性を得るために、修正済み項目合計相関と項目を削除した場合のα係数を参考に項目を除外した結果、α＝.813となった。除外した項目は「1. 人に頼るときは、自分が苦手なところだけでなく、すべて任せる。」「3. 人を頼っても相手は嫌な気持ちにならないと思うので、人を頼ることができる。」「12. 人に頼るのは、相手が自分よりうまくできると思ったときだ。」「15. 人に頼るのは、自分が何もできないときだ。」「18. 頼るからには、自分だけでやるより良い結果を出してほしい。」の５項目である。

以下、14項目から構成された尺度として、その合計得点を分析に用いる。なお、各分析はデータがそろっている者を対象として行った。

2. 心理的距離と「頼れる感」の関連

1）尺度と投映法による心理的距離と「頼れる感」の関連

尺度の得点及び投映法の得点を基準に平均点以上を遠群（距離が遠い）、平均点以下を近群（距離が近い）とし、組み合わせた４つの群（遠遠群、遠近群、近遠群、近近群）に分け、独立変数とした。「頼れる感」を従属変数として一要因分散分析を行った

(1) 父親

有意な主効果がみられ（$F(3,207)=5.68$, $p<.01$）、多重比較（Bonferroni法）の結果、近近群が遠遠群と遠近群よりも「頼れる感」が高かったが、近近群と近遠群に有意な差はみられなかった（Table2-1）。

(2) 母親

有意な主効果がみられ（$F(3,207)=9.98$, $p<.01$）、多重比較（Bonferroni法）の結果、近近群が遠遠群と遠近群よりも「頼れる感」が高かったが、近近群と近遠群に有意な差はみられなかった（Table2-2）。

2) 尺度による心理的距離及び距離の評価と「頼れる感」の関連

尺度による心理的距離について平均点以上を遠群（距離が遠い）、平均点以下を近群（距離が近い）とした。距離の評価については、「かなり近い～どちらかというと近い」を近群、「ちょうどよい」をＭ群、「どちらかというと遠い～かなり遠い」を遠群とした。２つを組み合わせた６つの群（遠遠群、遠Ｍ群、遠近群、近遠群、近Ｍ群、近近群）を、独立変数、「頼れる感」を従属変数として、一要因分散分析を行った。

(1) 父親

有意な主効果がみられ（$F(5,205)=4.51$, $p<.01$）、

多重比較（Bonferroni法）の結果、近近群が遠遠群と遠近群よりも「頼れる感」が高かったが、近近群と近遠群、近M群に有意な差はみられなかった（Table3-1）。

(2) 母親

近遠群の該当者がいなかったため5群を独立変数とした。

有意な主効果がみられた（F（4,206）＝8.11, p<.01）。多重比較（Bonferroni法）の結果、近M群が遠遠群と遠M群よりも、近近群が遠遠、遠M、遠近群よりも「頼れる感」が高く、近M群と遠近群の間に有意な差はみられなかった（Table3-2）。

3）投映法による心理的距離及び距離の評価と「頼れる感」の関連

投映法の平均点以上を遠群（距離が遠い）、平均点以下を近群（距離が近い）とし、評価については、「かなり近い～どちらかというと近い」を近群、「ちょう

Table2-1　父親との心理的距離と「頼れる感」：尺度と投映法

（尺度×投映法）	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠遠（n= 56）	52.73	7.25	5.68**
遠近（n= 28）	52.61	5.33	
近遠（n= 16）	56.81	6.03	**遠近,遠遠 ＜ 近近***
近近（n=111）	56.10	5.45	

Effectsize＝0.29(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

Table2-2　母親との心理的距離と「頼れる感」：尺度と投映法

（尺度×投映法）	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠遠（n= 55）	51.60	6.67	9.98**
遠近（n= 43）	53.81	4.90	
近遠（n= 12）	55.58	2.22	**遠遠,遠近 ＜ 近近***
近近（n=101）	56.86	6.02	

Effectsize＝0.38(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

Table3-1　父親との心理的距離と「頼れる感」：尺度と評価

（尺度×評価）	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠遠（n= 36）	52.94	7.52	4.51**
遠M（n= 26）	52.92	6.18	
遠近（n= 22）	52.00	5.62	
近遠（n= 4）	50.00	8.51	**遠近,遠遠<近近***
近M（n= 49）	55.84	5.08	
近近（n= 74）	56.76	5.39	

Effectsize＝0.33(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

Table3-2　母親との心理的距離と「頼れる感」：尺度と評価

（尺度×評価）	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠遠（n=10）	49.30	7.87	8.11**
遠M（n=37）	51.73	6.27	
遠近（n=51）	53.82	5.06	**遠遠,遠M,遠近<近近***
近M（n=25）	56.44	3.88	**遠M＜近M***
近近（n=88）	56.81	6.18	

Effectsize＝0.40(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

どよい」をM群、「どちらかというと遠い～かなり遠い」を遠群として、組み合わせた6つの群（遠遠群、遠M群、遠近群、近遠群、近M群、近近群）に分け、独立変数とした。

「頼れる感」を従属変数として一要因分散分析を行った。

(1) 父親

有意な主効果が見られなかった。

(2) 母親

近遠群の該当者がいなかったため5群を独立変数とした。

有意な主効果がみられた（F（4,206）＝5.71, p<.01）。多重比較（Bonferroni法）の結果、近近群が遠遠、遠M群よりも「頼れる感」が高かったが、近近群と遠近群との間、近M群とその他の群の間に有意な差はみられなかった（Table4）。

Table4　母親との心理的距離と「頼れる感」：投映法と評価

（投映法×評価）	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠遠（n= 9）	48.89	8.20	
遠M（n=28）	51.79	6.75	5.71**
遠近（n=30）	53.83	4.47	
近M（n=35）	55.09	4.53	**遠遠,遠M＜近近***
近近（n=109）	56.23	6.22	

Effectsize＝0.33(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

3. 夫婦関係の認知及び親との心理的距離と「頼れる感」の関連分析

1）尺度

夫婦関係の認知得点の平均点以上を近群（距離が近い）、平均点以下を遠群（距離が遠い）、父親及び母親との心理的距離について、平均点以上を遠群（距離が遠い）、平均点以下を近群（距離が近い）とし、組み合わせた8つの群（遠/遠・遠群、遠/遠・近群、遠/近・遠群、遠/近・近群、近/遠・遠群、近/遠・近群、近/近・遠群、近/近・近群）とし、独立変数とした。「頼れる感」を従属変数として一要因分散分析を行った結果、有意な主効果がみられた（F（7,200）＝6.30, p<.01）。多重比較（Bonferroni法）の結果、遠/近・近群、近/遠・近群、近/近・遠群、近/近・近群が遠/遠・遠群より「頼れる感」が高かった。また、遠/近・近群、近/遠・近群が近/遠遠群よりも「頼れる感」が高かった（Table5-1）。

2）投映法

夫婦関係の認知得点の平均点以上を近群（距離が近い）、平均点以下を遠群（距離が遠い）、父親及び母親との心理的距離について、平均点以上を遠群（距離が遠い）、平均点以下を近群（距離が近い）とし、組み合わせた８つの群（遠／遠・遠群、遠／遠・近群、遠／近・遠群、遠／近・近群、近／遠・遠群、近／遠・近群、近／近・遠群、近／近・近群）とし、独立変数とした。「頼れる感」を従属変数として一要因分散分析を行った結果、有意な主効果がみられた（F（7,200）＝3.82, p<.01）。多重比較（Bonferroni法）の結果、近／近・近群が遠／遠・遠群より「頼れる感」が高かった（Table5-2）。

3）距離の評価

夫婦関係の認知得点の平均点以上を近群（距離が近い）、平均点以下を遠群（距離が遠い）、父親及び母親との心理的距離について、「かなり近い～どちらかというと近い」「ちょうどよい」を近群、「どちらかというと遠い～かなり遠い」を遠群として、組み合わせた8つの群（遠／遠・遠群、遠／遠・近群、遠／近・遠群、遠／近・近群、近／遠・遠群、近／遠・近群、近／近・遠群、近／近・近群）としたところ、近／遠・遠群が０名と近／近・遠群が１名であったため、６つの群を独立変数とした。「頼れる感」を従属変数として一要因分散分析を行った結果、有意な主効果がみられた（F（5,201）＝4.35, p<.01）。多重比較（Bonferroni法）の結果、遠／近・近群、近／遠・近群、近／近・近群が遠／遠・遠群より「頼れる感」が高かった（Table5-3）。

【考察】

1．心理的距離と「頼れる感」の関連

父親との心理的距離については、尺度と投映法及び尺度と距離の評価の組み合わせにおいて、近近群が遠遠群と遠近群よりも「頼れる感」が高く、近近群と近遠群との間に有意な差はみられなかった。尺度において測定された心理的距離が近い、つまり父親との間で「心理的な面でのつながりを持っていると感じる」度

合,「親密で理解し合った関係を持っていると感じている」度合が強いほど、子どもの「頼れる感」は高くなることが示唆された。母親との心理的距離では、測定方法の組み合わせによって、結果が異なっていた。尺度と投映法では、父親と同様の結果であった。尺度と距離の評価では、尺度で心理的距離が近く、距離の評価が「かなり近い～どちらかというと近い」場合、尺度で心理的距離が遠い群よりも、「頼れる感」が高いという結果であった。また、尺度で心理的距離が近く、距離の評価が「ちょうどよい」場合と尺度で心理的距離が遠く、距離の評価が「かなり近い～どちらかというと近い」との間に有意な差はみられなかった。投映法と距離の評価においては、投映法で心理的距離が近く、距離の評価が「かなり近い～どちらかというと近い」「ちょうどよい」場合と投映法で心理的距離が遠く、距離の評価が「かなり近い～どちらかという

Table5-1　夫婦間の距離及び親との心理的距離と「頼れる感」:尺度

(夫婦 / 父・母)	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠/遠・遠 (n=40)	51.05	6.67	
遠/遠・近 (n=25)	54.88	6.11	6.30**
遠/近・遠 (n=27)	53.63	5.21	
遠/近・近 (n=23)	56.83	5.46	**遠/遠・遠＜近/近・遠,遠/近・近**
近/遠・遠 (n= 9)	49.11	4.46	**＜近/近・近,近/遠・近***
近/遠・近 (n= 8)	58.38	5.36	
近/近・遠 (n=19)	56.26	4.46	**近/遠・遠＜遠/近・近***
近/近・近 (n=57)	57.26	5.57	

Effectsize＝0.47(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

Table5-2　夫婦間の距離及び親との心理的距離と「頼れる感」:投映法

(夫婦 / 父・母)	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠/遠・遠 (n=36)	51.56	6.92	
遠/遠・近 (n=22)	56.18	6.77	
遠/近・遠 (n=14)	51.93	4.45	3.82**
遠/近・近 (n=43)	54.65	5.46	
近/遠・遠 (n= 7)	51.57	5.73	**遠/遠・遠＜近/近・近***
近/遠・近 (n= 7)	58.43	6.34	
近/近・遠 (n=10)	56.10	5.11	
近/近・近 (n=69)	56.68	5.56	

Effectsize＝0.37(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

Table5-3　夫婦間の距離及び親との心理的距離と「頼れる感」:評価

(夫婦 / 父・母)	平均値	SD	F 値及び多重比較
遠/遠・遠 (n= 4)	44.75	10.43	
遠/遠・近 (n=30)	52.97	6.95	4.35**
遠/近・遠 (n= 5)	53.40	1.62	
遠/近・近 (n=76)	54.39	5.62	**遠/遠・遠＜遠/近・近,近**
近/遠・近 (n= 5)	57.80	3.92	**近近,近/遠近***
近/近・近 (n=87)	56.39	5.80	

Effectsize＝0.33(Large=0.4 , Medium=0.25 , Small=0.1)　**p<.01 *p<.05

と近い」場合との間に有意な差が見られなかった。そのため、投映法において心理的距離が遠くても、母親との心理的距離が「近い」と感じていることが、子どもの「頼れる感」を高くすることが示唆された。

父親と母親との心理的距離については、測定の仕方で結果が異なること、投映法での心理的距離よりも、質問紙及び心理的距離の評価などの意識的な水準での心理的距離の方が子どもの「頼れる感」との関連が強い可能性が考えられる。

本研究では、意識的、自覚的に認知している心理的距離（質問紙）と前意識的、無意識的に感じている心理的距離（投映法）の差に注目して検討しようとしたが、十分に検討できなかったため、投映法での心理的距離の測定方法の改善が必要であると思われる。0～19までの得点範囲にもかかわらず、平均値が5.45、SDが4.02と低い範囲であった。友人関係の心理的距離を測定することを想定した方法であったため、両親との心理的距離を測定するにあたっては、比較基準を検討することが必要であると考える。

2. 夫婦関係の認知及び親との心理的距離と「頼れる感」の関連

質問紙では、夫婦間、父、母との距離がいずれも遠い場合より、夫婦間の距離が遠くても、父、母との距離がいずれも近い場合と父母いずれかとの距離が遠くても、夫婦間の距離が近い場合、「頼れる感」が高い結果となった。また、夫婦間の距離が遠くても父、母との距離がいずれも近い場合は、夫婦間の距離が近く、父、母との距離がいずれも遠い場合よりも、「頼れる感」が高かった。また、夫婦間の距離が近い場合、父との距離が遠く、母との距離が近い場合の方が、父との距離が近く母との距離が遠いよりも「頼れる感」が高い結果であった。投映法では、夫婦間、父、母との距離がいずれも近い場合の方が、夫婦間、父、母との距離がいずれも遠い場合より、「頼れる感」が高いという結果のみしか得られなかった。評価では、夫婦間、父、母との距離がいずれも近い場合に加えて、夫婦間の距離が遠くても父、母との距離がいずれも近い場合及び夫婦間の距離が近く、父との距離が遠く、母との距離が近い場合は、夫婦間、父、母との距離がいずれも遠い場合より「頼れる感」が高い結果であった。

夫婦は遠く、父と母との距離が近い場合には、間を取り持つような関係性と想定し、「頼れる感」は低くなると思われたが、尺度及び評価において、夫婦間、父、母との距離がいずれも遠い場合よりは、「頼れる感」は高いことが示唆された。また、夫婦間の距離が近い場合において、父、母との距離がいずれも遠い場合は、父と遠く母と近い場合に比べて「頼れる感」が低く、さらに、夫婦間の距離が遠くても、父、母との距離が近い場合の方が、「頼れる感」が高い結果であった。

以上より大学生の場合、夫婦間の距離よりも、自分と両親の心理的距離の方が、また父よりも母との心理的距離の方が、「頼れる感」に影響している可能性が考えられる。ただし、母との心理的距離の影響については、女子学生が多いことも関連していると思われる。

また、本研究では、人に頼ることに対してネガティブな印象を与える「甘え」や「依存」という言葉ではなく、「頼れる感」という尺度を新たに作成することを試みた。今回作成した「頼れる感尺度」は、自分が何かを実行できない時に、自分でできる部分は自ら行なうが、そうでない部分は他者に依頼できるかどうかを測定しようとした。何かを実行する時に自他の区別をつけながら手伝いを求める内容であるため、必ず、自ら何かをする状況になるが、見守られるなど、相手にいてもらうだけで近さを感じ、その存在を頼れる感じがするということもあると思われる。つまり、「する」時に頼れるのか、「いる」時の安心感などにつながるのかという質の異なる「頼れる感」があると考えられるが、本尺度では後者を捉えることができなかった。そのため、夫婦関係の認知及び親との心理的距離と「頼れる感」の関連をより明らかにするために、今後は、その質の違いを十分に捉えられる尺度を作成し、検討する必要があると思われる。

引用文献

天貝由美子（1995；1997） 信頼感尺度 心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社 pp.104.

土居健郎（1971）「甘え」の構造 弘文堂

伊藤裕子（2001）青年期女子の性同一性の発達―自尊感情、身体満足度との関連から― 教育心理学研究, 49 , 458-468.

金子俊子（1989）青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3 , 10-19.

美山理香（2003）大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究 九州大学心理学研究, 4, 27-35.

諸井克英（1996）夫婦関係満足度尺度 心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社 pp.149.

大島聖美（2013）夫婦間の信頼感と両親からの支持的かかわりが若者の心理的健康に与える影響の男女差 発達心理学研究, 24, 55-65.

高橋文子・生島博之（2017）青年期の母娘関係における距離と精神的自立についての一考察―精神的健康との関連から―　徳島文理大学研究紀要，94，39－50.

竹澤みどり・小玉正博（2004）青年期後期における依存性の適応的視点からの検討　教育心理学研究，52, 310-319.

玉瀬耕治・相原和雄（2005）相互依存的甘えと思いやり、屈折した甘えと自己愛的傾向　奈良教育大学紀要，　54, 49-59.

土田恭史・田中勝博・鈴木澄香（2009）不等号を用いた親への心理的距離測定の試み　目白大学心理学研究，　5, 43-52.

内田早紀奈・石田弓（2014）青年が捉える両親の夫婦関係の認知が青年のレジリエンスに与える影響　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，13, 37-50.

付記：

本研究は、第二筆者が2015年度に提出した修士論文のデータを、第一筆者が再分析したものである。調査に協力いただいた皆様及び再分析にあたり貴重なご意見をいただきました岩橋宗哉先生、上野行良先生に心より感謝申し上げます。